

## ハナミズキ

大西 緑

昨日までの雨がうそのように晴れ上がり、青い空に青い空が重なった五月。庭のフェンスに絡みついた黄色いモッコウバラの香りが、ほのかに匂う。

美沙は夫のバジヤマを竿に通して、両手でパタパタとしわをのばした。

洗濯物を干し終えて、朝の連続ドラマでも見よう、と部屋に入る。

電話のベルが鳴った。

左肩の付け根の骨を折って入院中の夫か

らだ。単行本を二、三冊持ってきて欲しいとの連絡だった。

入院して二週間。すっかり病院生活にも馴れたようだし、今日くらいは病院に行かず、家の窓を開け放しにして、部屋の掃除でもしようかと思っていたのに、美沙の思惑は外れた。

夫の信行は、美沙と結婚して三十年になるが、家のことには全く無頓着に過ごしてきた。

庭の草が伸びても、木が生茂げようとも、部屋の電球が切れていても、何一つ関わりなかった。

しかし、今年三月、定年退職して退屈した日々を過ごしていた夫が、この頃急に思い立ったよ

うに庭木の剪定を始めた。

銀杏の大木の黄緑色の葉っぱが窓を覆うくらいに伸びたのがどうにも気になったのか、今までにないことだった。

「ハナミズキだけはそのままにしておいてよ」

意外と手順よく作業を進めている夫に美沙は大声をだした。庭で一番大切にしている木だ。切られたらたまらない。

義父がまだ元気だった頃、どこかの植木市で買った薄紅色と白のハナミズキは、大きくまっすぐに伸びて、今では庭にでんと陣取っている。

義父はおだやかな人だった。

戦争で友人を亡くしたのが、自分の人生で最も

悔しいことだと言っていたことがあった。そして、

付け加えた。

「信行が、あんたのような嫁さんを選んで、元氣な孫を二人も産んでくれたことが一番嬉しいことだけだな」

日焼けした、くしゃやくしゃの顔を美沙に向けて言った。

義父はきつと、ハナミズキは孫二人が誕生したるしに、と思っただけだが言わなかった。立ち枯れでもしたら大変だとしばらくは心配気な様子だった。

「銀杏が終わってもハナミズキまではしなくて、そのままにしておいてよ」

美沙はもう一度念を押す。

「ああ、わかってている」

うるさそうな夫の声がやつと返ってきた。

美沙は、あとは知らん振りをきめこんだ。夫にこれ以上に口出しすれば、手伝えと言われかねない。美沙は夫に任すことを決め込んだ。

その日、半日も作業をしていないのに庭が異様に静まった。

美沙が出てみると、夫は仰向けになって唸っていた。自分で切った木につまずいて、転げたようだ。

(もう、なによ)

眉をしかめながらも、痛いとうめく様が尋常

の頃になると、美沙は少々うんざりしていた。

ひときわ寒かった冬が過ぎると、いつの間にか春は素通りしてしまつて、早や初夏。外は軟らかな日差しに満ちている。

(そうだ。今日は市内を回るバスに乗つて病院へ行こう)

町村合併で美沙の住んでいる街の隅々まで市民の足にと、コミュニティバスが走っている。

市内どこまで行つても百円なので、通称「百円バス」だ。

ベテランドライバーだと自負している美沙は、買い物はもちろん少々の遠出でも自分の車を使うので、バス停が家の近くにあるのに、まだ

でないと思つた美沙は、取りあえず夫を車に乗せ、近くの外科医院を通り過ぎ、大事をとつて総合病院へと走つた。

案の定、肩の骨が折れていた。それも単なる骨折ではなく、難しい場所の複雑骨折で入院するこ

とになつてしまった。

六十歳になつた今まで、怪我や、病氣一つしなかつた夫の入院に少し戸惑つた美沙だったが、それ以上にまるで重病人にでもなつたような弱音を吐く夫には困惑した。

入院して二週間にもなるのに、何かと理由をつけては美沙を呼び出す。三日も続いた雨の日だつて、夫は容赦なく美沙に用事を言いつける。こ

利用したことがなかつた。

一寸した日頃からは変わった思い立ちなので、美沙の心は弾んだ。

病院の、行きと帰りを時刻表と照らし合わせてメモを取つた。十時に出かけて、二時過ぎに帰ることができる丁度いい時刻の便がある。

美沙は夫の言い付け通り、興味深そうな本を探そうと二階へ上がった。

以前は子供部屋だつたその部屋は、定年を機にいつの間にか夫の書齋らしきものになつた。夫は、前からきちんとした自分だけの部屋を持ちたがっていた。部屋でパソコンに向かつている時間も案外多かつたようだ。

夫の机の上には読みかけの雑誌が拡げたま  
まになっていて、ペンケースと名刺入れはその向  
うに置かれている。

何事にも、ものぐさな夫が、もうあまり使うこと  
のなくなったはずの名刺入れを、さも大事そうに  
置いているのが、可哀そうとも滑稽とも言いがた  
い。

美沙は本棚から適当に二冊の単行本を抜き出し  
バッグにいれた。読み広げてあつた雑誌もとは思  
つたが、一べつして、読み終えたかも知れないと  
取りやめにした。それが必要な次の機会でもい  
いだろう。

美沙はバス停のある表通りへと出た。鼻歌でも

いつもとは違った気分、美沙はうきうきしてき  
ていた。夫が入院している病院へと足を運ん  
でいる気なんて、なくしかけている。

いくつかのバス停に止まり、そして何人かの人た  
ちが乗り降りしたバスは、しゃれた住宅が並ぶ  
停留所で止まった。次がもう終点の病院だ。  
乗る客がいるような気配はないが、運転手は誰  
かを待っている風だ。時刻表に合わせているのか、  
それともいつも乗る人でもわかっているのだろうか。

やがて白髪の品のよい老女が一人で乗ってきた。  
八十歳は過ぎているのかも知れない。

「お待ちどうさまです。造作おかけします」

歌いたい気分になっている。  
待つ間もなくバスは直ぐにやつて来た。

地元を走るバスに乗るのは、子供の頃以來だ。少  
し逸る気持ちを抑えながら、美沙は先客の三人  
共々「百円バス」の乗客となった。

バスは子供たちの遊び場となっている公園を通  
り抜け、駅前の交差点を左折して、川沿いの道路  
へと向かっている。昨日までの雨が車道を濡らし  
たからか、明るい陽光がひろがって眩しいくらい  
だ。

窓が隔てる町の風景は、自分で車を運転してい  
る時には全く気付かなかった野の花で彩られ  
ている。

老女は丁寧な運転手に頭を下げ、続けて五、  
六人の車内客にも笑顔を向け、前よりの席へ腰  
を落とした。

老女を乗せて、バスは再び走り出した。が、バ  
スの中は先ほどの気配とは違う、和やかな空気が  
流れ出したように感じられる。老女の顔も、他の  
乗客も気がつけば、みな穏やかに微笑んでいる。  
次で終点だからなのか、陽気のせいか後ろか  
ら見る運転手の顔さえも綻んでいる気配だ。

美沙もその空気の中にとどぷりと浸かっていた。  
それはずい分遠い昔、春の陽だまりの中で祖母  
と庭先で過ごしたような懐かしさをよぎらせ、  
美沙の心を和ませていた。

終点の病院前に着いた。誰も我先にとあわて降りる様子がない。自分の順番を承知しているかのように、一人ずつ運転手に笑顔をむけて、降りていく。

美沙はあわてることなく、彼女の後に従った。老女は乗り降りの段差を用心しながら、意外にしっかりした足取りで降りた。

老女も席を立ったので、美沙の手助けが必要なら

(以上4月9日放送分)

と思い、気遣いながら声をかけた。

「大丈夫ですか」

「ええ、ありがとうございます。ゆっくりなら

大丈夫ですよ」

老女は美沙に軽く右手を差し出し、

(どうぞ、お先に)

と、いった仕草をした。

「いえ、いえ、急ぎませんから」